

山崎豊子

沈まぬ太陽
(一)

アフリカ篇・上

沈^{しず}まぬ太陽^{たいよう}
(一)

アフリカ篇・上

発行——一九九九年六月二五日

著者——山崎豊子
やまざきとよこ

発行者——佐藤隆信

発行所——株式会社新潮社

162—8711 東京都新宿区矢来町七一

電話——編集部(03)三二六六—五四二—
読者係(03)三二六六—五二二—

振替——〇〇一四〇—五—八〇八

印刷所——錦明印刷株式会社

製本所——加藤製本株式会社

© Toyoko Yanasaki 1999. Printed in Japan

乱丁・落丁本は、二面側ですが小社読者係宛お送り
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

価格はカバーに表示してあります。

ISBN4-10-322814-8 C0093

沈まぬ太陽
(一)

アフリカ篇・上
* 目次

第一章

アフリカ

9

第二章

友情

50

第三章

撃つ

82

第四章

クレーター

122

第五章

影

165

第六章

カラチ

197

◇ 目次 (二) (五) ◇

沈まぬ太陽 (二) アフリカ篇・下

第七章 テヘラン

第八章 ナイロビ

第九章 春雷

沈まぬ太陽 (三) 御巢鷹山篇

第一章 レーダー

第二章 暗雲

第三章 無情

第四章 真相

第五章 鎮魂

第六章 償い

第七章 紫煙

第八章 怒り

第九章 御霊

沈まぬ太陽(四) 会長室篇・上

第一章 新生

第二章 朝雲

第三章 黒い潮

第四章 曙光

第五章 波紋

第六章 狼煙

第七章 弔鐘

沈まぬ太陽(五) 会長室篇・下

第八章 風

第九章 流星

第十章 射る

第十一章 迷走

第十二章 幾山河

あとがき

参考文献

取材協力者リスト

沈
ま
ぬ
太
陽

沈まぬ太陽
(一)

アフリカ篇・上

カバー写真◇岩合光昭
装　　幀◇新潮社装幀室

第一章 アフリカ

濃厚なブルーの空に、雪山のような雲が動き、果てしない草原に、灼けつく太陽の陽炎が波打っている。視界を遮る何ものもない。

恩地元は獵銃を携え、四輪駆動のランドクルーザーのハンドルを握って、ナイロビから東南三百四十キロのボイに向っていた。

草原の真ん中に、一筋通った簡易舗装の道路は、亀裂が無数に走り、少しの油断でも、車が横転してしまうから、神経が張り詰める。

突然、前方に褐色の煙がたつように見えた。砂嵐が巻き起ったのだった。恩地は車の速度をゆるめて、砂嵐をやり過してから、再び、時速百キロで走った。

眼前に真つすぐ延びる道路は、遙か地平線にまで延び、地面の盛り上ったところが道路の果てかと思つて行きつくと、そこは果てではなく、さらに起伏をもちながら延びている。

キリマンジャロ山の側峰が見えるあたりになると、草原の両側には、キリン、インパラ、縞馬などの野生動物が草を喰み、ところどころに、枝を大きく広げたアフリカ・アカシアに、ハタオリ鳥やムク鳥が群をなして、飛び交っている。

ナイロビを正午過ぎに出発して、ボーイの狩猟区へは遅くとも午後四時までに入らなければ、今日の目的である象撃ちはできない。恩地は、重いハンドルをぐいと握り直した。

地面の土が茶褐色から、次第に赤く変り、サバンナの緑が際だつようになった。ツアボ地域のボーイ狩猟区に入ったのだった。

恩地は監理事務所で車を止め、狩猟予約証明書を示し、備えつけの書類に名前と、時刻を記した。午後四時十分――、極力、飛ばしたつもりでも、予定した時刻より遅い。

「そいつは？」

監理官が、ランドクルーザーの助手席に坐ったままの現地人のムティソを顎でしゃくった。恩地が自分のサーバントであると伝えると、許可のスタンプを捺した。

「ブワナ（旦那）、ンドウフ（象）は撃てそうかね」

恩地の杜宅の庭番兼ハンターの雑用係で、いつも連れて来ているムティソが、よく利く眼を、早くも周囲に向けはじめた。

背丈まで伸びた灌木帯には、象の道が網目のようにについているが、車で探すから、なるべく太い象道ぞうみちを、ゆつくりときき耳をたてて辿たどって行く。

「足跡がありますぜ」

ムティソが、灌木ブッシュが踏みしだかれているところを指した。下枝が折れ、草が地面にめり込んでゐる。確かに象が通り過ぎた様子があり、まだ、時間はそう経っていないようであった。

「ムティソ、あの岩山へ登って探すぞ」

広大なブッシュには、ところどころに岩山があり、象の居場所を探すには、恰好の場所であった。車を岩山の近くまで着け、周りにアフリカ・バッファローや毒蛇が潜んでいないか、慎重に

見定めてから、まずムティソンが敏捷な足どりで登り、続いて恩地が獵銃を手に登った。

風がそれほどあるわけでもないのに、岩山に登ると、眼下のブッシュからとも、空からともなく、風音が聞える。

「ブワナ、いた！」

指す方向を双眼鏡で観察すると、赤褐色の大きな固形物は、ボイ独特の赤土をかぶった象ではなく、蟻塚であった。

「ただの蟻塚じゃないか」

と云い、仔細に双眼鏡で探したが、見当らない。

車に戻ると、ムティソンは自分の信用を取り戻すように、助手席に戻らず、車の屋根にくくりつけたスベア・タイヤに尻を据えて、象探しにかかった。恩地がゆつくりとハンドルを切ると、ガサガサと音がし、体長二、三十センチの子鹿のようなデイクデイクが、素早く横切って行った。

視界がひらけたところで、ムティソンが天井を叩き、

「ブワナ、糞」

と告げた。確かに象の糞が点々と転っているが、赤茶のエナメルを塗ったように光っているのは、直射日光で灼かれ、変色しているのだった。

「もう、二、三時間前のものだ」

ケニアでも、年々、象の数が減っているとはいえ、ボイを中心とするツアボ地域には二万頭の象が棲息している。

陽が西に傾き、神の怒りにふれて逆だちさせられたという伝説のあるバオバブの樹が、巨大な灰色のシルエットを見せはじめた頃、ブッシュが途切れた草地に、赤い土煙がたっている。三頭

の象が、長い鼻で赤土を吸い、体にかけて土浴びをしていた。

恩地は、双眼鏡で三頭の象を観察した。額の線がなだらかで、雄であることは、ほぼ間違いないが、三頭とも若象で、牙がまだ充分、発達していない。恩地が仕留めるのは、大きな成象であった。

三頭をやり過し、思わず、吐息をついた。象を撃てるチャンスは一日のうちで、朝と夕刻の二回しかない。陽が沈みかけようとしている今日は、もうそのチャンスは望み薄であった。日没までに、夜食用にホロホロ鳥を三羽、撃ち落した。

葉先が鋭く尖ったアカシアの灌木に、太陽が黄金の残照を放ったかと思うと、日輪がくつきり輝き、大空を茜色に染めて没した。

恩地の脳裡を、日本の敗戦の日に見た夕陽が掠めた。

焼け野が原になった焦土に、夕陽だけが生きものののように輝き、眩いほど映えていた光景が、十四歳の少年の胸に強く刻まれた。昨日まで心の底から信じ、仰ぎ見て来たものがすべて裏切られ、崩壊し、着のみ着のままで焼け出され、夕陽の中で飢え、体を震わせたことを、今もって覚えてる。

「ムティソ、今日はもう諦めよう、野営の場所を探す」

恩地はハンドルをゆっくりきり、ブッシュを背後にした見通しの効く平地で、車を停めた。

ムティソは車から飛び降り、後部席から小さく畳んで丸めた二枚のキャンバス地のグラウンド・シートを広げ、簡易テントを張りはじめた。雨水が流れるように、二本の木の間に広げたテントを斜め吊りにし、英国陸軍放出のベッドを組み立てた。

その間、恩地は水筒の湯ざましを飲み、サファリジャケットのポケットから煙草を出して、火

を点けた。運転の疲れと、張り詰めていた神経がほっと、緩む最初の一服であった。

ムティソは小まめに体を動かし、焚火をたくと、食事の用意にとりかかった。さっき撃ち落したホロホロ鳥の羽根を筆^{ひし}り、串刺しにして、火にかけ、携帯食のチャーハンをコッヘルで温めた。

「ブワナ、食事の用意が出来ました」

ホロホロ鳥の串焼きと、チャーハンをよそったアルミ皿をさし出した。

恩地は生温いビールを開け、ムティソにも勧めると、ぐいと飲み干し、ホロホロ鳥の腿肉を頬ばった。

「明日は、きっと撃つね」

ムティソは、真つ白な歯を見せた。

「うむ、お前が見たこともないような象を必らず仕留めてやる」

恩地は、口元のビールの泡を拭^{うす}って、頷いた。

食事を済ませると、ムティソが後片付けをし、恩地はテントに入った。

ハリケーン・ランプが、恩地の顔を照らし出した。アフリカの陽に灼けた顔は、鼻梁^{びりょう}が通り、見開いた眼は鋭い光を溜め、唇は固く引き結ばれている。精悍な顔だちであるが、頬のあたりに贅^{かた}りがある。それは尋常ならざる体験をした人間だけが持つ、人を寄せつけない孤独で、強靱なものであった。

恩地は、猟銃の手入れをはじめた。まず、夕方、ホロホロ鳥を撃った散弾銃を手を取った。火薬の滓^{かす}が残っていないか確め、機械油をしみ込ませたフランネル布で、汚れがなくなるまで丹念に拭き磨いた。

今日、使わなかつたライフル銃も、車の窓の隙間から砂塵が入り込んでいたから、馴れた手つきで、銃身の内部を掃除し、油を滲み込ませて、汚れを取り除く。

鋭く光る鋼鉄の光は、一見、冷徹非情に見えるが、恩地にとつては、これほど信頼出来る仲間はない。銃は大事に手入れをしている限り、決して自分を裏切らない。大事にしなかつた場合のみ謀反を起し、不慮の事故に繋がる。いわば愛用の銃は、獲物を撃つ道具であると同時に、自分の命を托すものであつた。恩地は、自分の背丈と肘丈に合せて買い求めたライフル銃に、強い愛着を覚えた。

ムテイソは、テントで寝る恩地のために、太い倒木をくべ足した。万一、忍び寄つて来る野獣に備えてであつた。

「もういい、お前は寝なさい」

恩地の言葉に、ムテイソははじめて、

「ララ サラマ（よくお寝みになれますように）」
と挨拶した。

「ララ サラマ アサンテ サーナ（お前こそ、今日はどうも有難う）」

銃を持たない丸腰のムテイソは、ランドクルーザーの中で寝た。

夜になると、急激に気温が下り、漆黒の闇に包まれ、夜空に南十字星が凍りつくようにまたたいている。恩地は、遥けきところに独りいるわが身を思い、ジョニー・ウオーカーの瓶を取り出すと、キャップで生のまま飲んだ。咽喉が灼けるように熱い一瞬を過ぎると、酒のうまさ臓腑にしみわたつた。日本にいた頃は、コップ一杯のビールで顔が紅らんだのが、今ではウイスキーの中瓶を独りで空けても何ほどでもない酒豪になつたのだつた。

ウーホツオウー。ライオンの雄と雌、子供たちが共に咆哮する声であつた。時々、ウーウーと聞える低い咆哮は、仲間の群から取り残された雄ライオンの悲しみの声のようだ。

不意に、ギヤーギヤー、絞め殺されそうな鳴声が聞える。樹の上にいるヒビが、下から豹に威嚇され、怖れ慄く声であつた。他にも、ハイエナの腸を抉るような唸り声が入り混つて、聞える。

東アフリカのケニアへ来て三年目になる恩地には、ケニアのサバンナに棲息する獣の声を聞き分けることが出来た。獣の悲しみの声を聞く時は、自分の最も悲しかったことを思い、怒りの声を聞く時は、自らが真底、憤つた時のことを、飢えの咆哮を聞く時は、自分の心が最も飢え凍えた時のことを思い出す。

自分が、中近東の僻地を鹽廻しされ、さらにアフリカへの赴任を命じる一片のテレックスを手にした時、いかに社命とはいへ、明らかに懲罰人事であることに、体を震わせて憤つた。その苛酷さは、江戸時代の流罪にも似たものであり、遠島を申しつけられた流人が、両手をうしろにして舟に乘せられ、暗い海原を沖に向つて漕ぎ行かれる様が、自分の姿に重なつた。

組織の一員として、自分の信念を客観的な判断に基づいて云うべきことを具申し、正すべきところを正したことによつて疎まれ、これほどまでの懲罰人事が行われていいものであろうか――。通常、企業では、中近東やアフリカなどの僻地勤務の場合は二年、長くて三年を以て限度とされてゐるにもかかわらず、自分の場合は、中近東のパキスタン、イランを加えて、足かけ八年もの長期に及んでゐる。

漆黒の闇に包まれた原野の思いがけない近さで、か細いライオンの声が、途切れ、途切れに聞えて来る。親に飢えを訴える子ライオンの声だつた。

恩地の胸に、日本に残した妻子への思いが疼いた。